3月議会川口の一般質問より　**学校給食について**

川越市の給食の食べ残し全国平均の約2倍

本市の学校給食は、菅間・菅間第二・今成の3つの学校給食センターで作られています。残菜量（食べ残し）は各センターごとに多少の差はありますが、この10年間の平均残菜量は12.03％と、全国平均値の約2倍にのぼり、近年微増とも言える状態で、現状を考えると、既存の対策にとどまらず削減目標値の設定しながらの新たな取組みが必要と提言をし、市は「当面10％未満になるよう献立の作成に努めたい」との考えを示しました。

食べる時間は10分～15分!?　現状認識に“差”

15年前から指摘している点ですが、一向に改善されないこの問題。教育委員会は常に「前後の授業の影響や、準備や片付けけに時間を要する等の影響で、短くなる時もある」との認識を示してきました。そして、「喫食時間が確保出来るよう努めたい」とも。しかし、私が先生方のお話を伺い、学校を視察する中では、『**15分確保できないことは日常茶飯事**で、**10分ちょっとしか確保できないことがあるの現状**』だと認識しています。以前は、多くの児童生徒が「食べる時間が足りない」とアンケートで答えていることを指摘し改善を求めましたが、今回は、福岡県で児童が給食をのどに詰まらせ亡くなった事例を紹介し、文部科学省も「食に関する指導の手引き」の中で窒息防止策として、「早食いは危険であることを指導すること」としていることからも、喫食時間確保の必要性と、確保出来ていない現状を指摘し、強く改善を求めました。答弁では、「ゆとりのある喫食ができるよう努めたい」と述べるにとどまり、今回もそれ以上の言及はありませんでした。

給食の牛乳廃棄量「年間100ﾄﾝ以上」ここ10年で2倍以上の増加

学校給食における牛乳は高栄養の割に安価で、メニューから外すことが難しいとされていますが、牛乳が嫌いな子も多く、昔のように半強制的に飲ませる指導をしていないこともあり、**手を付けずそのまま捨てられる牛乳が増えています**。本市の状況を問うと、**牛乳の廃棄処分量は増加の一途を辿っており、今や年間100トン以上が捨てられている**ことが明らかになりました。現在の処分方法は、教室で残った牛乳をバケツに移し、各給食センターへの輸送用大食缶に入れ換えた後、各センターで処分場への輸送用のタンクに移し換え、委託先の処分場に送られています。処分場では、脱水処分した後、発酵させ堆肥化、処理しきれない量は直接セメント工場に搬送され焼成し、セメント原料にしているとの事でした。

約1割は捨てられ、飲んでいない子は3割近い？

対応策が必要！　牛乳選択制という選択肢

多摩市では、令和5年9月から診断書の提出が無くても、飲用牛乳停止届の提出により飲用牛乳を停止できるという対応を始めました。本市同様、手つかずのまま廃棄される食品ロスの現状、飲用による体調不良等で飲めない児童生徒に対するため、医師の診断書を求めずに牛乳の飲用を止めることが出来るよう教育委員会に請願が出され採択されたこともあり、選択制の導入に至ったようです。

多摩市が令和2年に調査した時点での廃棄量は全体の約8％、本市は令和4年時点で9.6％となっており、食品ロスを減らすという観点からも対応の必要性を訴え、牛乳選択制に対する市の見解を聞きました。廃牛乳量について、答弁では「大きな問題と認識しており、牛乳選択制も検討の一つと捉えている」と答えました。

もっと『お米』を給食に！　全国平均に満たない現状

本市東部地域には水田地帯が広がっており、米飯給食の全てのお米を川越産で賄える環境がありながら、未だ全国平均以下の回数しか提供されていない現状を指摘し、更なる地産地消、農業振興の意味からも、米飯給食の回数を増やすべきだと提供回数の増加を求めました。市は「パンや麺とのバランスを考慮した上で、増加も含め考えたい」と答えました。↗